

# 「中国の近代化に対する、日本と中国の認識の相違」

大谷英子\*

## 1. はじめに

19世紀半ばウエスタン・インパクトを受けて近代化に着手した中国は、その手本を最初はイギリスに、そして次は距離的にも近く文化や状況に類似点の多い日本に求めた。

日清戦争後中国に勢力を伸張していた日本にとって中国の近代化は望ましくなかったが、長い歴史を持つ交流相手として提携しようとする「興亜」の感情も残存させていた。この一見相反する感情は表裏一体となって日本人の言動に表われたが、中国は日本の侵略者と近代化の師という二面をどう中和して受け入れたであろうか。日本が侵略を正当化して述べる歴史は日本の近代化は成功、中国は失敗」という日本の成功史観に基づき<sup>(1)</sup>、それは「近代化=西欧化」とする近代化論を理論的根拠とする。しかしこれでは史実は歪曲され、この史観に基づく教科書で学ぶ日中両国の不幸な歴史の一コマを知らない世代に中国蔑視観を植えつける原因にもなるであろう。本論文では、非西欧社会の経験に基づく「内発的発展論」を根拠に中国にも自国に合った近代化を模索した「キー・パーソン」が存在したことを探る。彼らは日本に対する二つの感情をどう中和し、彼らを取り巻く日本人の意図をどう感じていたかをみることによって、日本の成功史観に基づく史実を再考したい。

## 2. 近代化をとらえる理論

### (1) 「近代化=西欧化」の観点からみた中国の近代化

「近代化」の概念は20世紀後半より経済成長の別語となり、「西欧化」同義語とされた。戦後世界の頂点に立ったアメリカを普遍的な発展目標とする「初期近代化論」が1960年代に出され<sup>(2)</sup>、また「近代日本に関する会議」では日本を低開発諸国の発展の指針とすることが提唱された<sup>(3)</sup>。しかし近代化=西欧化とするならば、アジア諸国の近代化では何らかの形で伝統と西欧文化の間に軋轢が生じる。その様相は(1)伝統文化は近代化を阻害するとして極力排除する、(2)近代化を伝統文化の危機としてあくまでも抵抗する、(3)近代化を歴史的必然ないし国家の独立に不可欠と認め、伝統文化を破壊せず双方のよりよい発展の可能性を模索する、と分類できるが<sup>(4)</sup>「和魂洋

\* 聖ヨゼフ学園中学・高等学校

才」を掲げた日本の近代化はまさに(3)であった。

それによって富強化した日本と中国の命運を分けた原因を、遠山茂樹氏は資本主義化への本源的蓄積の量の差とした<sup>(5)</sup>が、芝原拓自氏は中国の売国投降的な近代化は完全に日本とは質的に違っていたとした<sup>(6)</sup>。しかし資本主義の未成熟は日中ともに同じだとしてその差異の原因を思想的背景と人間的基礎に求めたものに富永健一氏の「ただ西洋においてのみ存在した」ものの受容の比較<sup>(7)</sup> ベネディクト氏やライシャワー氏の人材比較によるもの<sup>(8)</sup> 等がある。

## (2)「内発的發展論」による、非西欧社会の近代化の再考

日本で初期近代化論は反論を受け、「近代化」の概念を用いる当事者として主体性が問題とされた<sup>(9)</sup>。日本は受動的な自主により国粹と西欧化を巧みに癒着させ近代化をしたが、近代化が西欧化ならばアジアを否定し、伝統文化から近代文化への変容ならば“断絶”を経験したことになり、これは近代日本の運命に潜む本質的矛盾であった。この「西洋文化の実験室」と言える日本の近代化の成功と挫折の先行目標が中国からの留学生の動向で、その結果が敗戦であったと上垣外憲一氏は指摘する<sup>(10)</sup>。その表面的な近代化を竹内好氏はドレイの勤勲による脆いものだとし、丸山真男氏も永遠なものに照らして事物を評価する思考法が弱い地盤に浸潤した歴史的蓄積がないものとした<sup>(11)</sup>。更に高田淳氏は日本は自分達が放擲した封建的儒教倫理を中国で増幅させて自らの優越性の現実的根拠にしたと指摘した<sup>(12)</sup>。

1960年代後半に初期近代化論自体に破綻が生じた。R. P. ドーア氏らはそれはイデオロギー的であると指摘し<sup>(13)</sup>、西ドイツの「社会史」グループは実証的な歴史研究と社会科学の理論的成果の融合を主張した<sup>(14)</sup>。アメリカの比較政治研究委員会のL. W. パイ氏はある社会を支える諸基準を他の社会に適用することに反対し、西欧のみが近代化の種を宿すのではないとした。S. N. アイゼンシュタット氏も非西欧社会では伝統が近代化に生きると指摘した<sup>(15)</sup>。

このような「修正近代化論」は高度工業化社会に疑問を抱く日本にも登場し、近代化を図る非西欧自身の指標・仮説として「内発的發展論」が提示された。市井三郎氏は「洋の東西を問わず、人間の歴史には『すぐれた伝統の形成→形骸化→革新的再興』という共通したダイナミックスが長期的に観察でき」この伝統再興の担い手が「キー・パーソン」であると主張した。<sup>(16)</sup>そして伝統崩壊の際にはキー・パーソンがどう対処するかはその教育を中心とする経歴が決定すると武者小路公秀氏は指摘したのである。

## 3. 中国の近代化とそれに対する日本の対応

(1)中国における危機感と西学受容 — 日本観とのかかわりをふまえて —

アヘン戦争により世界の資本主義市場に巻き込まれた中国は、思想的にも伝統的な価値観からの転換を迫られた。先覚的な知識人は社会変革のための新しい価値を求めて西欧の学問（西学）を受容する態度を模索したのである。伊藤秀一氏は彼らの危機感は、(1)アヘン戦争前後、(2)太平天国革命前後、(3)日清戦争前後、(4)義和団事件前後で変化し、(4)の段階では封建的概念の桎梏を解いて本格的な西学の登用に乗り出したとした<sup>(17)</sup>。また熊野正平氏はどの時期も西学受容の態度には、(1)国粹的・伝統的精神文明本位主義の態度、(2)全盤欧化主義の態度、(3)中西綜合主義の態度という三つの傾向があると指摘した<sup>(18)</sup>。

両者の分類を合わせて各時期の危機意識と西学受容の態度をまとめたのが有田和夫氏の

(1)太平天国～洋務運動期は「日常的恒常的世界の崩壊により、中体西用で西学受容」

(2)洋務運動～変法運動期は「滅種に至る危機により、中体西用または西体西用で変法」

(3)変法運動～革命運動期は「立ちおくれプラス分裂が意識され、進化論によって変革」

(4)革命運動～五四運動期は「世界的平等権の希求」

という分類である<sup>(19)</sup>。

しかしここで考慮しなければならないのは中国の西学受容の中継地点・日本の存在である。日本の儒学者はアヘン戦争で西学の優秀性をはっきり認め開国後は奇蹟的な速さで西学を学んだが、中国では魏源が『海国図志』で「外夷を制御しようとするれば、必ず先ず夷情を洞察すべし<sup>(20)</sup>」と主張したものの、西学受容は1894年の日清戦争の敗北まで本格化しなかった。以後中国は日本に学ぶことを西学受容の最短コースとするが、当時中国と日本は「侵略国」と「被侵略国」という関係にあった。明代の倭寇以来時として日本はナショナリズム的憎悪の対象であったが、日中関係について実藤惠氏は、(1)明治初年～日清戦争は「攻日論流行時代」、(2)日清戦争～明治末年は「親日時代」、(3)大正初め以後は「排日時代」と区分する<sup>(21)</sup>。よってここでは実藤氏の区分と有田氏らの区分を照合し、日中関係の変化と中国における日本経由の西学受容がどのようにかわりあっていくのかを調べていく。

## (2)西学受容の態度と対日感情の変化

衰退期の清朝の知識人は国家滅亡の処方箋を探したが、依然伝統を無視した発言は受け入れられなかった。そこで中国近代ブルジョワ啓蒙思想の先駆者龔自珍は「古に借りて今を風する」として春秋公羊学の進歩史観を以て改革を主張したが、改革の目的が清朝政治の維持である点には限界があった<sup>(22)</sup>。同門の魏源は「西洋の長所を学んで西洋の侵略を制する」と主張し<sup>(23)</sup>、幕末日本で外国研究が進んでいることを評価した。この『海国図志』を読んだ佐久間象山らは早くも儒学と西欧文化との調和を試み実践の精神も富んでいたため、吉田松陰は魏源を「理論を重ん

じ、科学技術を軽んじる」と批判したが<sup>(24)</sup>、これは当の中国では『海国図志』は冷遇され中央官僚が奏請しても取り上げられなかったことによると思われる。よって低い官職にあり、母国のために外国研究を行なった魏源は松陰や象山に劣らない知識人で、開国前の日本に既に注目していた点では先見の明があったと言える。むしろ獄中で『海国図志』の購入を催促する一方、「交易にて魯（ロシア）・墨（アメリカ）に失う所は、また土地にて鮮（朝鮮）・満（満州）に償うべし」<sup>(25)</sup>と書き留め松陰の二面性こそ、その後日本の方向を暗示するものであったと思われる。

松陰の真意は太平天国の乱にも窺える。彼は太平天国の指導者洪秀全が優れた戦術家であったので、日本より先に朝鮮や満州に進出することを恐れていた。<sup>(26)</sup>しかしプロテスタント宣教師に学び、中国の陋習の廃棄と法制の西欧化などを『資政新篇』にまとめて洪秀全に提言した洪仁玕は、アメリカを手本とする開国後の日本の成果を予測していたのである。

この松陰の二例から中国が西学受容に熱心な日本に倣うよう主張するのに対し、日本は中国の危機を自国の戒めとして中国への侵略を企てるという両国のあるすれ違いが読める。しかし当時の中国はまだ日本の本性に気づくどころか、先覚的知識人の馮桂芬が著作『校邠廬抗議』の「西学を採るの議」で日本は西洋諸国を歴訪し強国を目指していると指摘したものの<sup>(27)</sup>、日本を知らない政府を何ら動かす手立てにはならない段階であった。

清朝が本格的な日本研究に着手したのは1871年の日清修好条規以降で、国内は洋務運動中であったが明治維新はそれに様々な作用を与え、特に「中体西用」では近代化は不可能であるとする“先覚者”を洋務派から分化させた<sup>(28)</sup>。その先覚者には政府の役人では初代駐日公使の何如璋や当時最大の知日家である外交官の黄遵憲、洋務専門家の知識人では宣教師の王韜があげられる。王韜は、『扶桑日記』の中で日本の西学受容の欠点として「表面を学んでいる。学ぶ必要のないものを学んでいる。絶対学ぶべきでないものを学んでいる。学ぶことを急ぎすぎている。真似が度を越える。」<sup>(29)</sup>と指摘した以外は、一様に明治維新を高く評価した。しかし清朝の関心は専ら本格化した侵略に対する「対日警戒論」や全面的な西学受容の批判に向けられ、日本を近代化の手本とすることや連携を考える傾向は小さかったため、この先覚者達の主張もほとんど政府に取り上げられることはなかったが<sup>(30)</sup>、これは次の変法運動への大きな布石となっていくのである。

### (3)日本の新聞論調にみえる中国観の変遷

中国がこのように日本に対する関心と無関心に割れている間、日本はどのような中国観を持っていたのであろうか。まず政府の脱亜論や興亜論は共に「支那を併領するのは日本帝国の利益にして、亦支那民族の幸福なり<sup>(31)</sup>」という支那保全論を根底としていた。

また世論における中国観は新聞の論調に窺える<sup>(32)</sup>。侵略政策が始まって、1875年11月28日の「東京日日新聞」の論説「支那決して軽蔑すべからずなり」などは清国蔑視の偏見とその潜在力の評価を主張した。また1879年1月31日の「朝野新聞」の論説「清民の奮って強魯に抗するを聞きて感あり」は日清が提携してロシアに抗することを提案した。しかし1884年の清仏戦争を契機に日清提携論は翳り、侮蔑的な中国観や脱亜入欧的思想が窺えるようになり、朝鮮をめぐる甲申事変を機にこの年の末には「郵便報知新聞」の「支那朝鮮をして倨傲心を増長せしむる勿れ」において遂に日清対決論に帰結した。翌年3月16日の「時事新報」に福沢諭吉の「脱亜論」が掲載されたが、福沢は洋務運動への評価などから一時この論を取り下げた。それを確立させたのは十年後の日清戦争における日本の勝利であり<sup>(33)</sup>、これは日本人の中国観に決定的な侮蔑感を生じさせたのである。

#### 4. 日中関係の二つの側面

##### (1) 「黄金の十年」と「吸収主義」

日清戦争の敗北で洋務運動の失敗をはっきりと悟った中国では、若き士大夫達が全面的な改革を目指す「変法自強運動」をおこした。この運動を思想的に支えたのは伝統教育による官界への正規な道を断念して西学を学んだ者で、日清戦争の敗北は彼らに発言の場を開いた。彼らは論理の発展に桎梏をはめていた「天変」と「三代聖人」という誤った自然観と人間観を否定し、変革のための理論としてイギリスの「進化論」を採用した<sup>(34)</sup>。

遅れて西学の受容に乗り出した清朝は日本への留学を奨励し、張之洞は『勸学編』の中でその理由を「一、路近くして費を省き、一、中国と近く考察には易く、一、東文（日本）は中文に近く、……中日両国の情勢風俗相近く、倣行は易し、事半ばにして功倍すること<sup>(35)</sup>」と述べている。留日生の数は表Aのように増加したが<sup>(36)</sup>この西学受容の態度は問題を残した。それは根本誠氏が「西学の彼等の実際は、英国や日本のごとくになりたいと願っていて、フランス革命のごとくにゆきたいとは望んでいなかった。だが英国は勿論、日本と雖も、政治だけが近代に変わったのではない彼等はその見逃していたのではないか。政治が変われば社会も変わると、簡単にみていたのではないか<sup>(37)</sup>。」と指摘するように、自国を破った国を模倣するという姿勢は余りにも国情を顧みないものであった。日本の近代化は皮相的と非難されるものの、憲法はドイツ、学制はフランスというように自国に最適のモデルを模索した。この姿勢の違いが西学の吸収度の差を招いたとしても不思議ではない。

この日本留学のもう1つの問題は「侵略国」日本が留日生を受け入れた意図である。日本は受

表A

中国人留学生	
年	学生数
1896	13人
97	9
98	18
99	202
1900	?
01	280
02	(500)
03	(1000)
04	(1300)
05	(8000)
06	?
07	(7000)
08	(4000)
09	(4000)
10	?
11	?
12	(1400)
13	(2000)
14	(5000)
15	?
16	(4000)
17	?

( ) はおよその数

入れ態勢を整えて奨励策をとったが、その実は留日生から親日派を養成し中国における侵略拡張策に協力させようとする「吸収主義」<sup>(38)</sup>を持っていた。その姿勢それは変法に敗れた康有為らの亡命の手引きした伊藤博文や、支那保全のために日英同盟を結ぶ一方で支那罵倒を非難して早稲田大学に中国人留学生を受入れ<sup>(39)</sup>、遂に対華二十一カ条要求で本性を現した大隈重信など歴代の首相の言動に顕著である。中国は留日生を派遣するに当たってこの吸収主義に気がついていたのかは疑問であるが、この時期は「日本と中国の長い文化交渉史の中で中国が日本に学ばねばならぬとした唯一の時期だったかもしれない」<sup>(40)</sup>とされ、アメリカのD. R. レイノルズ氏は1898～1907年を近代日中関係史の「黄金の十年」と称して、この間日本に做った清朝の改革は「失敗に終わったが、この十年の変化と改革がなかったら、二十世紀の近代中国の出現は不可能なことであったであろう」<sup>(41)</sup>と指摘した。

## (2)中国近代化の「キー・パーソン」

それではこの日中の「黄金の十年」に新旧時代の橋渡しを担い改革に携わった人々の中から近代化のキー・パーソンを探し得るとして、ここでは嚴復を事例として考察する<sup>(42)</sup>。

嚴復は14才の時父の死で西学に転向し、当時の最富強国イギリスに注目し、特にH. スпенサーの社会進化論に傾倒した。彼は自然の運行が人間の営みを決定するという天人合一説こそ社会進化抑制のホルモンだと否定し、スペンサー理論の拡大解釈から適者生存のために富強を生む自由な環境の必要性を主張した。ここで彼はまたA. スミスの自由な経済活動を主張したのである。このように彼は翻訳によって近代西洋思想を変法運動の理論的基礎としたが、同時に進化は緩慢な累積の過程であるとして、孫文らの革命は時期尚早であると否定した。また彼は“分水嶺の世代として伝統教育も受けていたので伝統と反伝統という二分法をとらず、頑迷派に西洋思想を啓蒙するに雅文を以て翻訳をするなど伝統を用いた啓蒙活動を行った。また彼は民族の伝統が国家の富強を阻害するならばそれを保たずという新しい形のナショナリズムを唱え、「中西相輔」として西学と伝統が貢献し合って富強化することこそ伝統を守る道であるとした。晩年彼は第一次世界大戦で荒廃したヨーロッパに絶望し、戦争状態には粗暴な力の日本の近代化の方が適するとして、イギリスに倣うよりも直接的な近代化の道と考えた。しかし彼が翻訳において日本製新語の使用を潔としなかったのは<sup>(43)</sup>、官僚としてナショナリズムの義憤より日本を模倣する近代化を優先せざるを得なかった康有為らの心中を代弁していると思われる、まさに嚴復は伝統を組み替えて近代化を目指したキー・パーソンであったと言えると思われる。

## (3)日本と中国の決別 — 桂太郎・孫文密約の夢 —

日本はアジア諸国の援助で日露戦争を戦ったが、「一たんこの戦争に勝利すると日本の態度はガラリと変わってしまった<sup>(44)</sup>」。第二次日英同盟以後日本の中国侵略も本格化し、中国の近代化に敵意を持った日本政府は1905年に「留学生取締規則」を出して留日生の孫文の中国革命同盟会への参加を監視したので<sup>(45)</sup>、留日生は激しくこれに抗議した。

変法運動の中心人物康有為は、日本亡命によって、生涯日本の侵略的意図を警戒するよりも日本に学ぶ姿勢を保ち続けた。しかしこの頃から中国の知識人達には、「もとよりかれらが日本の『近代化』を無条件に肯定したことを意味するのではなく、かれら独自の立場から日本に学ぶものは学びとろうとする姿勢のあらわれであり、日本の侵略的意図がいっそう明らかになれば……、かれらは日本をきびしく批判するのに決してやぶさかではなかった<sup>(46)</sup>。」という日本観の変化が表われた。革命派の章太炎は日清提携論を唱えていたが、義和団事件、日露戦争と1906年の訪日で軍国主義に苦しむ民衆を見て日本観を改めた。そして大隈重信の演説を「白人を率いて同類を侮辱する」と非難し、日本に対する非難はその近代化を支える西欧思想に向けられ、進化論は「善が進むと同時に悪もまた増進する<sup>(47)</sup>」として批判した。章太炎は日本を通して西学を学ぼうとした変法派とは異なり、「近代文明に抵抗することで民族的主体性を確立し、現代世界に対処しようとした<sup>(48)</sup>」のである。

章太炎に私淑をした孫文の西洋近代文明に対する態度を受け継いだ。堀川哲男氏は「洋務運動自体はともかく、洋務論者から変法論者、さらにそれ以後の流れが西方に対する抵抗、反植民地主義としてあらわれていることは、注意されなければならない。」とし、その結果「この抵抗の過程…西洋受容に対する抑圧的・拒否的態度を通じて、単なる西方の模倣ではないオリジナルな思想が生み出された<sup>(49)</sup>」のが孫文の「新三民主義」であると指摘した。しかし日本が西方以上の侵略者である以上、孫文の主張には日本に対する認識の変化も影響を与えたと考えられる。孫文は革命の根拠地を日本において宮崎滔天らの援助を受け、かの大隈重信も辛亥革命には「支那人の支那とせんとする自主的運動の序幕なり…<sup>(50)</sup>」と評価を送った。しかし対華二十一カ条要求によって孫文は「日本に依頼することから日本を批判することへと対日態度を改めた」が、なお「古来親しい関係を回復する」ために、日本の中国侵略政策は「その本心から来るものに非ず、余儀なくされたものである<sup>(51)</sup>」と日本に寛容な態度を示したので、「黄金の十年」以降減少していた留日生は再び増加した。しかし五四運動後中国では反日運動が激化し留学先も日本からアメリカやフランスに主流が移っていった。アメリカで学位を取った学生も多く、日本では中途退学者や速成教育が多かったのと対照的である。その「責任のかかなりの部分は日本政府の対中国政策にあり<sup>(52)</sup>」、吸収主義のために留学生を受け入れたものの、その狙いが裏目に出て日本が革

命の根拠地になるとたちまち激しい弾圧に乗り出したのである。また社会主義思想に興味を持った学生の間ではフランス留学熱が高まり、約6000名が渡仏した。

このように「もはや日本が留学生の行き先として魅力を失った存在となった以上、将来の凋落は目に見えていた<sup>(53)</sup>。」が、日本政府の吸収主義と留学奨励策という裏表の態度は中国をして日本以外の近代化モデルを探さしめたのである。ここで遂に日本と中国は決別し十五年の戦いへと突入するのだが、もし長州出身の政治家・桂太郎と孫文密約が成功していれば、戦争という最悪の事態だけは避けられたのではないかという想像がある。

孫文は辛亥革命後日本の援助に感謝して訪日し、第三次内閣を発足させた桂と密談をした。その核心は日中の提携で、「日中独提携」を構想した桂は孫文の提案を「図らずも自分と志と同一であった」と述べた。孫文の秘書戴季陶はその記録『日本論』で、桂は日清戦争で中国が強ければ日中が提携して日露戦争の被害も小さかったが「孫文先生が中国にいる以上、もう憂いを抱く必要はないであろう」として「世界の黄色人種はみな蘇生」すれば「中国を侵略するような拙策を取ることもありえない<sup>(54)</sup>」と述べたと記している。

よって帰国した孫文は反日の嵐の中でも「あえて親日的態度を表明した<sup>(55)</sup>」のだが、この密約は桂の退陣と死で遂に実現せず、戴季陶は「もし桂太郎が死ななければ、東洋の局面は絶対に今日のようなものでなかったと信ずるのである」と述べたのである。

ここにおいて「軍国主義の権化」の桂と「三民主義の宗祖」の孫文が本当に了解し合えたのかという疑問が残る。桂は台湾協会学校（後の東洋協会学校、拓殖大学）を「台湾の旧慣をなるべく傷つけないように尊重<sup>(56)</sup>」するために創立した一方で、日本帝国主義の片棒を担いだ。また戴季陶の『日本論』にしても、台湾の許介麟氏は「日露戦争前の日本はよかったが、その後悪く変質して軍国主義になった」という一貫性のない主張は「林房雄の『大東亜戦争肯定論』に逆用された<sup>(57)</sup>」と批判し、この著作が日本で出版され林がそれに便乗したことは、ライシャワーらの「日本の成功と中国の失敗という価値観」を持つ近代化論の発表と因果関係があると指摘したのである。

ここにおいて本論文の原点にたちかえることになった。日本が侵略行為を隠蔽して脱亜を興亜と、吸収主義を留学奨励策と塗り替えるのを、実は中国も手伝っていたのである。それは中国が近代化を急ぐ余り日本の表の外交態度に頼んで、あるところではその侵略主義に目をつぶっていたからである。こう考えると、吸収主義のために友好の仮面を被った日本と、ナショナリズムの義憤を抑えて日本に学んでいた中国との交流である「黄金の十年」など実は嫌悪すべきものに過ぎなかったのである。「黄金の十年」の正体が見えた以上両国の戦争は当然の帰結であり、桂と孫文の密約に夢を抱くことは未練がましい発想でしかない。しかし黄金の十年が見せかけであ



たとしても、孫文のおかげで日本が侵略しても最後まで日本の行動を理解しようとし、提携を求めてくれた中国人がいたことは、日本の近代史上の貴重な財産である、といえど締め括っておきたい。

5. 高等学校の歴史教育における中国近代史の取り扱いの再考

—— 変法自強運動の教材化の新視点を探る…康有為を事例として ——

これまでの研究をふまえると現行の教科書の記述に疑問が生じる点も少なくない。ここではまずその疑問点をあげ、次に康有為を事例に中国近代史の取り扱いを再考したい。

(1)日本の現行の「世界史」教科書における、変法自強運動の取り扱いについて

現行の「世界史」教科書7社23冊における変法自強運動の扱いは表Aのように整理できるが、大部分が洋務運動の失敗が日清戦争の敗北を招き、そこで日本型の近代化に着手したもがた失敗して革命に至ったという視点で捉えている。よって変法運動は思想的には洋務運動からつながることや、改革派と革命派は思想の相違から分化したという事実は見えず、日本の侵略主義が中国の近代化を翻弄したという実体は隠されている。

(2)中国・台湾・香港の歴史教科書における変法自強運動の取り扱い — 日本との比較 —

日本と中国の同世代が一つの史実を異なるとらえていれば、双方の間には真の理解や友好は生まれ得ないと考える。よって教材化の新視点として日中の共通理解のためには中国側の教科書からも参考になる点を抜き出してまとめてみた(表B)。ここでは明治維新を変法運動の手本としたという記述はなく、代わって洋務運動からの西学受容が変法運動の思想的基盤になっていることを強調している。また失敗についても康有為の責に帰するより西太后を押し出している点も異なっていると言える。

表A

問 題 点	問題があると思われる記述	史実に正確と思われる記述
日清戦争後の変革の動向	年々開明に変法自強運動、義和団事件、辛亥革命がおこったと列記。(多数)	様々な際目が平行して変革をおこしたことを並記。(3社 3冊)
変法	洋務運動との関わり	相いりかあった官僚を批判しその失敗から変法運動が生まれたとする。(5社11冊)
自強	手本とした対象	明治維新を手本に立憲君主制を目指し、全面的な近代化を行ったとする。(14冊)
運動	失敗の原因	清朝の保守派・西太后の反撃による(多数)
康有為	思想	公羊学派である(2社4冊)
	日本への亡命	亡命先数カ国に日本が含まれる(2社2冊)

表B

		中国初級中学課本「中国歴史」第一冊	台湾国史中学「社会」第三冊
明治維新	変法運動の手本	記述なし	記述なし
	どのように評価したか	天皇御制政権は帝制主義の発展に務め、国内は鎖国、国外は侵略拡張を行い、侵略の矛先は朝鮮と中国に向けられた	成功の結果アジア第一の土國になり、対外侵略を以て我が國に深い害をもたらした
変法運動	洋務運動との関連	改良派の維新運動には、受容した全面的な改革を主張したから明治維新の高まりにより変法運動になった。	湖林芬や鄧嘉耆が西学を主張したから明治維新の高まりにより変法運動になった。
	思想的基盤	・封建思想の束縛を抜けて外国に学んだ。 ・進化論の観念の影響が大きい。	

### (3) 変法自強運動の教材化の新視点 —— 康有為を事例として ——

変法運動の中心人物康有為の研究は、「■つの現代化」政策に伴う彼の近代化政策の再評価と、北京故宫博物院で彼が光緒帝に進呈した『日本変政考』が発見されたことでこの十年で進展した<sup>(58)</sup>。ここではその新しい学問的成果をふまえて教材化の新視点を探りたい。

康有為は儒教思想に基づく古い改革を、孫文は西洋思想に基づく新しい革命を行なったというように時期の後先で両者をとらえると、康有為が伝統と西学の橋渡しをした「キー・パーソン」であるという点は見えてこない。彼は洋務派から分化した知識人の主張を「再提起したものに過ぎなかった<sup>(59)</sup>」のであり、洋務運動を変法運動の礎石としたのである。また彼は各国の研究に基づく上奏の方法から、「託古改制」（古を今に用いる）ではなく既に「仿洋改制」（西洋を中国のために用いる）を採択していた<sup>(60)</sup>。そして亡命後は民間の秘密結社を指導するなど民衆の力による改革の必要性を悟り、改革派としては極限に達したのである。彼の日本亡命は吸収主義を企む伊藤博文の手引きによるもので、これは日本の中国に対する態度の二面性を示すために記述すべき事柄であると考えられる。

## 6. まとめ

日中の「黄金の十年」が両国の偽った本心の上に成立していたということは、日本だけではなく中国側からみた歴史にもある種の歪みがあることを浮かび上がらせた。しかしこの時期の近代化努力は失敗に終わったものの次の発展の礎石となったのならば厳復も康有為も近代化のキー・パーソンと言うことができ、またこの偽りの友好の中にも孫文のような人物がいたことはその後の日中関係に大きく貢献したと考える。本文論提出後、黄金の十年の日中教育文化交流史をまとめた阿部洋氏の著作が出版された。この著作を熟読した上で、この時期の教育に表われた日本の二面性を研究することを今後の課題としたい。

(注)

(1) 尾崎正英「日本と中国との比較研究のための序説」『日本文化と中国』中国文化叢書10

大修館書店 1968年pp. 1～23

(2) H. U. ヴェーラー『近代化理論と歴史家』山口定訳 未来社 1977年 p. 28

(3) 例えば、J. W. ホール 「日本の近代化 — 概念構成の諸問題 — 」『思想』 439号 1961年 pp. 40 ～ 44

(4) 国学院大学日本文化研究所『アジア文化の再発見』弘文堂 1984年 pp. 10～11

(5) 遠山茂樹「東アジアの歴史像の検討」『歴史学研究』 281号 1963年 参照

- (6) 芝原拓自『新しい歴史学のために』 1964年 pp.93～94
- (7) 富永健一「ウェーバーと中国および日本の近代化」『思想』767号 1988年 参照
- (8) 呂万和『明治維新と中国』 大興出版 1988年 pp.210～235
- (9) 日高六郎編『近代主義』現代日本思想史大系34 筑摩書房 1975年 参照
- (10) 上垣外憲一『日本留学と革命運動』 1982年 p.2
- (11) 丸山真男『日本の思想』 岩波書店 1961年 pp.1～20
- (12) 高田淳『中国の近代化と儒教』 紀伊国屋書店 1970年 p.17
- (13) R. P. ドーア「日本近代論の再検討 —— 近代化論はいかにして実り多い論争の可能性を生むか」 武田清子『比較近代家論』近藤 健 訳
- (14) H. U. ヴェーラー 前掲書 参照
- (15) 内山秀夫『政治発展の理論と構造』 未来社 1972年 p.12
- (16) 鶴見和子・市井三郎『思想のパラダイム』 筑摩書房 参照
- (17) 伊藤秀一「清末における進化論受容の前提 —— 中国近代思想史における進化論の意味その一 ——」『研究(史学編)』神戸大学文学部 22号 1960年 参照
- (18) 熊野正平「清末民初の中国人の西洋文明に対する態度」『二松学舎大学論集』1966年参照
- (19) 有田和夫『清末意識構造の変化』 汲古書院 1984年 参照
- (20) 呂万和 前掲書 p.129
- (21) 北山康夫『中国革命の歴史的研究』 ミネルヴァ書房 1972年 p.67
- (22) 中村俊也「龔自珍」日原利国『中国思想史 下』ペリカン社 1987年 pp.351～355
- (23) 呂万和 前掲書 p.124
- (24) 同上 pp.128～129
- (25) 井上清『日本の歴史 中』 岩波書店 1977年 p.150
- (26) 小島晋治・伊東昭男『中国人の日本観 100年史』自由国民社 1974年 pp.30～31
- (27) 西 順蔵『原典中国近代思想史 第二冊 アヘン戦争から太平天国まで』岩波書店 1977年年 pp.51～60
- (28) 呂万和 前掲書 pp.168～173
- (29) 武安隆・熊達雲『中国人の日本研究』 六興出版 1989年 p.119
- (30) 小島晋治・伊東昭雄 前掲書 p.42
- (31) 安藤彦太郎『日本人の中国観』 p.46
- (32) 芝原拓自校注『対外観』 岩波書店 1989年 参照
- (33) 初瀬龍平「『脱亜論』の再考」平野健一郎『近代日本とアジア』東京大学出版会 1984

年 pp. 19 ~44

- (34)伊藤秀一 前掲論文 参照
- (35)北山康夫 前掲書 p. 92
- (36)中込道夫・中村秀一・内山 隆 『「近代化の再考 —— その思想的基軸を求めて ——」』  
北樹出版 1986年 p. 183
- (37)根本 誠 「近代中国における外来文化の革命思想に及ぼした影響（上） —— 特に近代に  
おける西学の受容について —— 」 『東洋学術研究』 5巻 6.7号 1966年 pp. 57 ~63
- (38)呂万和 前掲書 p. 187
- (39)安藤彦太郎 『辛亥革命 中国近代化の道程』 早稲田大学出版部 1986年 pp. 117 ~118
- (40)高田 淳 前掲書 p. 21
- (41)呂万和 前掲書 pp. 191~192
- (42)嚴復については例えば B. I. シュウォルツ 『中国近代化と知識人 —— 嚴復と西洋 ——』  
平野健一郎訳 東京大学出版部 1978年や熊野正平「嚴復の思想の変遷」  
『一橋論叢』一橋学会 42巻 4号 1959年など
- (43)鈴木修次 『日本漢語と中国 漢字文化圏の近代化』 中央公論社 1981年参照
- (44)北山康夫 前掲書 p. 75
- (45)上垣外憲一 『日本留学と革命運動』 東京大学出版部 1928年 p. 126
- (46)小島晋治・伊東昭雄 前掲書 p. 56
- (47)野村浩一 『天演論ノート —— 中国における進化論の受容 —— 』 『立教法学』 1961年 3  
号 有斐閣 p. 191
- (48)小島晋治・伊東昭雄 前掲書 p. 60
- (49)堀川哲男 「清末における西洋受容についての試論」 『思想』 525号 1968年 p. 48
- (50)安藤彦太郎 『辛亥革命 中国近代化の道程』 p. 119
- (51)武安 隆・熊達雲 前掲書 p. 184
- (52)上垣外憲一 前掲書 p. 51
- (53)同上 p. 214
- (54)戴季陶 『日本論』 社会思想社 1972年 参照
- (55)石川 順 「桂太郎と孫文」 『海外事情』 1960年 7月号 拓殖大学海外事情研究所 p. 6
- (56)本多兵一他 「桂太郎の拓大」 『海外事情』 1960年 6月号 p. 4
- (57)許介麟 『中国人の視座から —— 近代日本論 ——』 そしえて 1979年 参照
- (58)川田梯一 『中国近代思想と現代』 研究出版 1987年 pp. 181 ~226

- (59) 彭澤周 『中国近代化と明治維新』 同朋舎 1976年 p. 70
- (60) 王曉秋 「康有為維新変法思想新探 —— 康有為の外国変政考を中心にして —— 」  
山田辰雄 『近代中国人物研究』 慶応通信 1989年 pp. 35 ~74